

サビエル生誕五百年

藤屋侃士  
(下松市幸ヶ丘)

## 神への渴き

## (ホスピタリティ番外篇(中))

昨年、初めて歴史と伝統を誇る帝国ホテルに宿泊して同ホテルが目指す「もてなし」に接し、それに客を心からもてなすかと

関する数冊の本も読んだ。

サービス業とはいえ、利益のためだけでなく、いかに

客を心からもてなすかと

生まれる喜びを共有するという理念のようものが根底にある。

つまり、日常生活の中でもホスピタリティは極めて大切なのだ。物質文明のが強く、他者との心からの交わり、共に生きるという

感覚が欠落する傾向にある。だからこそホスピタリティが必要なのだが、現実には人と人との関係にも

がき、何とも言いがたい渴みを持つ人が多いのでは

いう理念にふれる。「ホスピタリティ」は「もてなし」に似ているが、本質的には少し意味が違う。客へのサービスであるもてなしは一方通行の傾向が強い。一方、ホスピタリティは単なるもてなしだけではなく、相手と自分との双方向の交わりの中から生まれる喜びを共有するという理念のようなものがある。

中世から今日まで科学技術の進歩が人間を救うと思われてきたが、逆に精神的には混沌とした中で生活しているように思える。残された人生を輝いて喜びのうちに生きたいと、ホスピタリティを大切にしようとしてもいつも壁にぶつかる。人間同士の限界のようなものを感じる。そして神への渴きを覚える。

「神への渴き」この言葉は十六世紀に生きたアビラの聖テレジアの言葉である。今年は聖テレジアが生誕して五百年的節目の年である。彼女も四十歳ま

ており、それが営業成績のアップにもつながる。だが、日常生活の中でのホスピタリティは相手を大切にすることで自らを満たそうとしたそいう。その苦しみの中で神に出会う、観想修道会カルメル会を創立した。

アビラの聖テレジアの娘たちと呼ばれるカルメリットたち。その一つの修道院が山口市仁保にある女子カルメル会である。彼女たちは神を中心とした共同体の中でホスピタリティ精神で生きているように思える。私たち一人々々を愛して下さる神、友であ

カルメル会を創立した聖テレジア

ホテルをはじめとするサービス業では、客をもてなすという目的がはつきりしないだろうか。

ホスピタリティ番外編(中)

山口カルメル会のカルメリットたち



山口カルメル会のカルメリットたち